

## 6 ヒューマンケア・コミュニケーション技術の実現に向けてー 今後の展望 ー

### 6 Towards Realization of Human-care Communication Technology – Perspective –

澤井秀文  
Hidefumi SAWAI

#### [キーワード]

ヒューマンケア・コミュニケーション, 超高速ネットワーク, デジタルデバイド, QOL, 産学官連携  
Human-care Communication, Ultra High-speed Network, Digital divide,  
QOL(Quality Of Life), Cooperation among Industrial, Academic and Official worlds

通信総合研究所けいはんな情報通信融合研究センターは、平成12年7月に国際電気通信基礎技術研究所(ATR)ビル内に発足した。平成13年4月からは通信総合研究所が独立行政法人になったのを機に、小金井本所の情報通信部4研究室と関西支所情報系の3研究室が集結した後、5研究グループに再編され、西田結集型特別グループを含めた計6グループで研究活動を開始している。既に同ビル内のATRとの研究連携を活発に推進しているところである。近隣のけいはんな地区には、NTTのコミュニケーション科学基礎研究所をはじめとして多くの企業の研究所、奈良先端科学技術大学院大学(NAIST)、国立国会図書館関西館などの国立機関が点在している。

今後、これらの研究諸機関との連携を大きく幅広く発展させていく計画であるが、第1段階として、ATRの先端情報科学研究部と共同で、本特集号を企画した。

けいはんな情報通信融合研究センターでは、通信総合研究所の「ダイナミックプロジェクト」の一つである「ヒューマンケア・コミュニケーションプロジェクト」を現在推進している。これは、各研究グループが中核的に行う研究業務である「ドメインプログラム」と区別し、戦略的かつ分野横断的に内部・外部との連携を積極的に推進しながら、大学や民間の研究機関とは役割の異なる独立行政法人としてのミッションを果たしていこうとする試みである。このためには、当センターの研究資源(人材、設備、予算

など)のみで推進できることには限界があるため、通信総合研究所の関連部門(情報通信部門や無線通信部門など)のみならず、ATRをはじめとする上記の外部研究機関とも積極的に連携を図っていく計画である。

「ヒューマンケア・コミュニケーションプロジェクト」とは、人間を中心としたコミュニケーション技術の研究開発を行うプロジェクトである。近年の高度な情報通信時代においては、通信ネットワークの大容量化・高速化、デジタルコンテンツの膨大な蓄積などが加速されていくにつれ、時代の大きな波に取り残された人々にも通信技術の使用を可能とする努力も増大している。すなわち、深刻なデジタル・デバイド(digital divide)の問題である。

この問題が解消されない限り、情報を持つ者と、持たない者との生活の質(QOL: Quality Of Life)が拡大され、ひいては貧富の格差を引き起こす危険性すら内在している。この問題を解消するためには、従来の機械中心の考え方から、人間中心の考え方への転換が不可欠である。すなわち、高齢者、障害者を含めたすべての人にとって使いやすいコミュニケーション技術の開発が重要となってくる。超高速ネットワークで結ばれるサイバースペースを流通する膨大な情報の内、必要な情報を誰でも手軽に入手でき、自分の思いのままに変換、蓄積、検索、利用できるヒューマンフレンドリーなインターフェイスの開発や、これに関連する情報処理技術・通

信システム技術の研究開発が不可欠になってくる。

本特集号では、状況共有コミュニケーション技術、教育・学習支援環境実現技術、メディア環境創造技術、コミュニケーション支援環境創造技術の、大きく四つの分野に関連する技術について、通信総合研究所けいはんな情報通信融合研究センターとATR先端情報科学研究部で進

行中の11プロジェクトについて、研究の現状と将来展望について紹介した。

これらの研究プロジェクトが、今後大きく発展し、将来の高度情報通信社会におけるデジタルデバイドの解消に大きく貢献するとともに、ひいては国民生活レベルの向上、我が国の情報通信技術の発展に大いに貢献することを期待したい。

澤井秀文

情報通信部門 けいはんな情報通信融合研究センター研究主幹 工学博士  
知能情報処理、進化的計算論